長野日報にて連載中　毎月第一日曜日
2025年3月2日掲載

おらほの病院

102

～あたたかな医療をめざして～

諏訪中央病院　リレーコラム

医局と地域医療

諏訪中央病院
副院長 兼 整形外科部長
白澤（しらさわ） 進一（しんいち）

諏訪中央病院に赴任して18年が経過しました。医師となって30年、その大半を当院で過ごしてきたことになります。

18年前、私が当院に赴任したのは、都内の大学医局からの辞令によるものでした。その背景にはさまざまな事情がありましたが、ここでは割愛します。ただ、もし当時の医局からの派遣がなければ、自分の今も、病院の今もどうなっていたのか想像もつきません。いずれにしましても、特に整形外科領域については医局と地域の病院が連携することの意義は非常に大きいと考えています。

私の所属する大学医局には、臨床の現場で研修を受けながら働く若手医師（専攻医）が多数在籍しています。当院は彼らの教育を担う形で毎年2～3名の医師を受け入れています。現在、当院の整形外科には、医局から派遣されている私のほかに2名の専門医が在籍し、年間700～800件の手術を担当しています。この手術件数を支えるには、若手医師の力が不可欠です。

整形外科に限らず、外科系の医師の成長には現場での経験が最も重要です。かつての徒弟制度にも似たこの教育環境は、技術を磨くために今も必要な要素だと考えています。若手医師は現場で経験を積み、指導医のもとで技術を向上させていきますが、指導する側の私たちもまた、彼らから新たな視点や知識を得ることで成長していきます。

赴任前の12年間で、私は10を超える病院に勤務し、さまざまな規模や特色を持つ施設で経験を積んできました。医局に属していることで、多様な症例や治療法を学び、それを後進に伝えることができています。当院赴任後、40名を超える若手医師を指導してきました。多くは1年間の短い期間でしたが、彼らはその間に大きく成長し、全員が整形外科専門医の資格を取得しました。中には専門領域において日本をリードする存在となった医師も少なくありません。

患者様からは「担当医がすぐに変わってしまう」というご意見をいただくことがあります。しかし、このような循環型の教育制度がなければ、医療の質を維持することは難しくなります。医局からの派遣医師が地域医療に貢献し、またここで学んだことを次の現場に活かしていく。この流れがあるからこそ、当院の医療水準を保つことができているのです。ご理解いただけますと幸いです。

次回は4月6日掲載予定
（題字は鎌田實名誉院長）

白澤 進一（しらさわ・しんいち）
副院長兼整形外科部長。東京医科歯科大学、川口工業病院、同愛記念病院、船橋整形外科などで膝関節疾患、スポーツ整形外科研鑽後、平成19年より現職。医学博士（平成17年、東京医科歯科大学）